

PROLOGUE

木二中 学校だより No.33 令和7年1月14日
校長 山元 竜二

木更津市立木更津第二中学校
〒292-0801 千葉県木更津市請西941番地
☎0438(36)2280 FAX0438(36)2233
E-mail:kisarazu2-j@kisarazu.ed.jp
<https://www.fureai-cloud.jp/kisa-kisarazu2-j>



美德を以て飾りと為す

今から12年前、2013年1月6日から12月15日まで放送されたNHK大河ドラマ第52作、「八重の桜」。

このドラマは、同志社大学の創設者新島襄(にいじま じょう)の妻、新島八重(にいじま やえ〈やゑ〉)の生涯を描いた作品で、中学生の皆さんでもよく知っている女優、綾瀬はるかさんが主人公、新島八重を演じました。

幕末の会津藩で、砲術師範の娘として会津戦争を戦った「幕末のジャンヌ・ダルク」と呼ばれる新島八重の、数奇で波乱に満ちた生涯を描いた作品で、会津武士道の魂を守り抜き、生涯自分の可能性に挑み続け、人々の幸福を願った八重とその仲間たちの愛と希望の物語であると謳われています。Wikipediaによると、

新島八重は、江戸時代末期から昭和初期の日本の教育者、茶道家。同志社創立者の新島襄の妻として知られる。旧姓は山本。一部の手紙などでは「八重子」と署名してあることから、史料によっては新島八重子と書かれる場合もある。勲等は勲六等宝冠章。皇族以外の女性としてはじめて政府より受勲した人物である。

と記されています。

実は冒頭の「美德を以て飾りと為す」という言葉は、新島八重が残した名言です。その意味は、わかりやすく言うと、「外見ではなく、人として内面を磨き続け、その内面の美しさを飾りとして生きなさい」というもの。

幕末から明治の動乱の時代を生き抜いた女性ですが、戊辰戦争時には自ら銃を構えてスナイパーとして活躍したとか、西洋での生活が長かった新島襄との結婚によって西洋の感覚を身につけながらも、武士の誇りと道徳観は失うことがなかったとか、新島八重に関する資料を読めば読むほど、何事にも動じることがない男勝りな性格であったことが読み取れます。夫の死後、晩年は日清戦争、日露戦争で傷病兵の看護にあたる看護師として活躍し、1932年6月14日、86歳でその生涯を閉じています。私が生まれる(1966年8月)34年前のことですから、そんなに大昔の偉人さんではないと思います。

さて、新島八重が残した名言、「内面を磨く」、「美德(びとく)」という言葉にフォーカスしてみましょう。中学生である皆さんは「内面を磨きなさい」と言われたらどのように考えますか? 「自分にとって美德とは何ですか?」と聞かれたら何と応えますか?

そう言えば私は野球部の顧問(指導者)をしていた時、よく野球部員に「見せかけの技に走る選手になるな、心を磨け、研ぎ澄ませ!」とか、「技が人を動かすのではない、心が人を動かすのだ!」(私の恩師の教え)とか、何だか今思うとかなり抽象的なことをよく言っていたことを思い出します。もう少し具体的に、わかりやすくという反省はありますが、「心を磨け、研ぎ澄ませ」はまさに内面を磨くことであり、人を動かす「心」は内面そのものであると言えないでしょうか。そして、磨かれた内面、つまり心はその人となり(かたち)づくり、表情や言葉、態度、物事に対する姿勢となって現れるものと信じて止みません。

「内面」を違う言葉で表現してみましょう。皆さんは何だと思えますか? いろいろ当てはまるかと思いますが、私は「本性」もその一つであると考えます。「本性」とは、その人(人間)が生まれつき持っている性質や性格のこと。どんな人(保護者)の下で、どんな環境で生育したのかによって多少の変化はあるかもしれないけど、基本的には「生まれつき」の性向であるわけだから、そう簡単には変わるものではない。だからこそ社会の一員として人は「内面を磨く」という作業を怠ってはならないのではないのでしょうか。

「ついに本性を現したな」なんていう言葉に代表されるように、「本性」という言葉は、「表に現れない隠された(悪い)性格」のようにいいイメージがありませんが、本来は表に出ない本当の性格のこと。人は誰でもそれを「理性」という魔法で上手に包み隠しながら生きています。なぜだかわかりますか? 社会生活を営む上で必要なスキルだからです。どうしたら他者と関わりながら気持ちよく生きていくことができるかを考えているからです。誰もが悪い意味での「本性」だけで生きていたら、恐ろしい世の中になるということが想像できますよね。

ところが残念なことに、世の中のすべての人が内面を磨いているかということそうではない。どんなに内面を磨いていたとしても、誰にだって本性が透けて見えてしまう瞬間があります。私だってそう。

例えば、コンビニエンスストアの店員さんへの態度、身近な人への態度、車を運転する人であれば運転の仕方、大人であればお酒に酔ったとき。中学生の皆さんで言えば、笑い方だったり、先輩・後輩に対する態度だったり、何気ない言葉遣いだったり。そんな日常生活の些細な言動や仕草から、人となりを見限られるなんていうことはよくあることだと思います。

だからこそ内面を磨く。心を磨く。そして「利他の心」をもって他者に接する。そんなふう生きていくと、いつの間にか自分自身がそんな人たちに囲まれて生きていることに気がつく時がくる…。なぜなら人はそうやって人間関係を築いていくからです。人は誰だって嫌いな人、許せない人、この人はちょっと…、と思う人に自分の人生を支配されないよう生きようとするからなんです。さあ、あなたならどうする？

新島八重の言葉から「内面を磨く」ということについて考えるというお話でした。